

と陸上植物が共通の祖先をもつとする仮説を支持する生物学や古地史の種々のデータが検証される。後半部の6章では、仮説を発展させるためシャジク藻類と陸上植物の違いを比較し、7-9章では植物の形態・細胞構造と有性生殖、さらにはフェノール類物質の生合成経路がどのように進化したかを、これまでに得られた知識に基づき考察する。10章は、前半が‘まとめ’で、後半では、‘残された疑問や必要とされる研究課題と研究方法’が述べられる。原本は‘Origin of Land Plants (1993)’で、訳者は陸水産緑藻の分類学者と藻類を主対象とする細胞生物学者である。内容は推理小説の趣があるので、少し読み進むと、続けて読みたいくなる本でもあり、急速に進展したこの分野の最近の知見を得るのに、そして同時に、どこに問題が残っているかを知るのにまたとない書といってよい。この方面に興味をもつ学生のセミナー用の副読本としても好適であろう。(千原光雄)

□ Grabary D. J. and Wynne M. J. (eds.): **Prominent Phycologists of the 20th Century** 360 pp. 1996. Lancelot Press, Nova Scotia. US\$ 25.

アメリカ藻類学会創立50周年を記念して出版された小冊子で、20世紀に活躍し、藻学の分野に大きく貢献した世界の藻学者40名の生い立ち、藻類研究への道、藻学研究の主たる業績等がエピソードを交えて記述される。人選に際しては、生存者でないことを前提とし、編者は世界各地のその道の人々に非

公式に意見を聞き、それらを参考にしたという。掲載される学者は Geitler, Fritsch, Skuja, Hustedt, Pascher, Smith, Parke, Prescott, Setchell and Gardner, Kylin, Papenfuss, Taylor, Drew, Feldmann, Hämmerling, Pringsheim, von Stosch, Bold, Provasoli, Manton 等で、日本からは岡村金太郎と山田幸男の両先生である。小型の本であり、いつでもどこでも気軽に読め、それでいて、得るところや教えられるところの多い伝記集である。(千原光雄)

□ 大野正夫 (編): **21世紀の海藻資源—生態機構と利用の可能性—** 280 pp. 1996. 緑書房. ¥3,800.

これまでにない海藻の利用にはどのようなものがあるだろうか、といった内容で、応用面での海藻研究の新分野の開拓を目指した本である。14章から成り、そのいくつかを紹介すると、「伝統的食品の寒天と新しい素材のカラギナン」「海藻パルプとアルギン酸繊維の“紙”」「カンキツ類の生産と海藻資源」「磯の香りと性フェロモン」「海藻から抽出されるレクチン」「海藻から抗酸化性物質の生産」「海藻から抗菌性成分の探索」「海藻からの抗癌活性物質」などで、これらの題名からも、上記の編集方針がよく窺い知れる。執筆者に、いわゆる‘藻学者’が少なく、他分野で活躍し、現在海藻を研究対象としている方々が多いのもこの本の特徴の一つである。海藻、特に海藻の利用面に興味をもつ人には一読の価値がある。(千原光雄)